

言語からの子どもの育ちに関する考察 Part II

—我が子の言葉の記録行為と討論会を通しての育児力の成長—

錦見信子

清水美智子

(東海子どもとことばの文化研究会) (刈谷市教育委員会囑託 母と子の図書室読書相談員)

はじめに

「東海子どもとことばの文化研究会」は、子どもの言葉を豊かに育み、意思を通じ合わせる会話能力をいかに培っていくかを目的とした活動をし、母親に我が子の言葉の記録を呼びかけ、討論会を行っている。第55回大会においては、その言葉の記録から母親自身に見えてきたことについて報告した。今回は、言葉の記録行為と討論会が、母親の育児力の成長になっているかどうかについて考察してみる。

目的

子どもも親も孤立していると言われる現代社会では、日頃から親子が話し合える雰囲気づくりが大切であると言われて久しい。しかし、家庭での育児力低下が指摘される中でどのようにすればよいかという具体的な方法はあまり示されていない。そこで、「東海子どもとことばの文化研究会」の会誌『子どものことばに耳をすます』に掲載されている言葉の記録と討論会の記録を分析して、母親がどのように子どもを見たり、応じているかを探ってみる

I 親子相互作用

親子のコミュニケーションは現実の生活の中で相互のかかり合いとして展開される。そこで、母親のどのような言動が子どもに影響を及ぼすか、また、子どもの言動が逆に母親に及ぼしている影響を調べる。

1. 母親から子どもへの影響

母親の対応の仕方は多様である。母親の言葉により子どもは励まされもするが、心を閉ざす場合もある。

①子どもの状況に応じて対応

「死んだらどうなるの」と不安げに尋ねる子どもに、「死」に対する不安を取り除く方向でその子に理解できる言葉や内容で説明している。

(a)論理的、科学的な説明

事例1 「命のつながりという視点で」 小3

「お祖父さんやその前のお祖父さんから命はつながってきた。そして子どもが生まれてまた命が伝わる。

人はいつかは死ぬけれども、その子どもの命は地球の歴史として脈々と流れていく。だから、死ぬということは別に怖いことではなく、今与えられた人生を一生懸命に生きるという事が一番大事だよ」

事例2 「数を数えて言葉遊びのように」 5才

子「僕、いくつまで生きられるの？」

母「100まで生きられる人もいますよ。数えてみる？」

「1,2,3,...」と一緒に数えていった。まだ20位までしか数えられないので、60~70と数えていくと、

子「僕はそれだけ生きられれば充分」

(b)ファンタジックな説明

事例3 「赤ちゃんに生まれ変わる」 5才

子「おじいちゃんになったら、次は死ぬの？」

母「おじいちゃんの次はね、赤ちゃんになるのよ」

事例4 「死んでも一緒」 小3

「死んだら、何でも好きなものになれるんだよ。お日様になってもいい。風になってもずっと吹かれて世界中を回っていてもいいんだよ。ママはY君と同じものになってあげるから、死んでも会えるからね」

②子どもの心を開く対応

事例5 「穏やかに対応」 小1

夜遅くなくても娘は宿題をやらず、注意されふてくされていたが、しばらくすると、

子「おかあさん、さっきはごめんなさい」

「どうして叱られる前にやらないの？」といういつもの言葉を飲み込んで、穏やかに

母「これから、気をつけてね」

と受け止めたら、子どもは素直な気持ちになった。

事例6 「子どもに与えた時間的余裕」 5才

田んぼの溝の中にある泡のような物は何かと聞かれ、即答できなくて考えていると、

子「雲だよ。竜は落ちなかったのかな？きっと竜が落ちたから、あんな雨がふって、もう、帰ったから雨がやんだんだね。よかったね」

実はそれはただの泡であったが私は蛙の卵と思いその種類を考えていたので、子どもに想像の世界を広げる時間的余裕を与える結果となった。

③子どもの心を閉ざす対応

事例7 「共感できなくて」 3才

保育園でプール遊びをしているうちに、娘は水に顔をつけることができるようになった。家に帰って「私、泳げるようになったよ」と報告したが、家族の者は各々「お父さんも泳げるよ」「お母さんも泳げるよ」「お兄ちゃんも泳げるよ」と答えた。

子「どうせ、わたしは3年しか生きていないもん」

2. 子どもから母親への影響

母親は子どもの言動から自分の対応のまずさや、いたらなさに気付く。

事例8 「母親の失言」 小6

ピアノのレッスンに行く前の練習をなかなか始めない息子に

母「一回レッスンがお休みだと始まる時間も忘れちゃうの？もう最悪！」

子「僕の人生でそんなことで最悪って言わないで」

事例9 「感情的な言葉」 4才

つい、感情的になって怒りまくっていたら…

子「いじわるな声で言わないで、優しく言って。人は叱るとき、大きな声だしちゃダメなんだよ」

II 言葉の記録と討論会に参加した母親の感想

1. 母親が気づいたこと

母親は、会話を記録し話し合うことにより、子どもに対する認識をあらたにすると同時に、自らの対応について気づくことがたくさんあった。

子どもに対して思慮深く冷静でありたいと思っているが、現実には感情のコントロールができずに悩んでいた。それは参加者共通の悩みであったこと。

子どもの言葉に耳をすまし、記録し、母親同士が話し合う事が、その困惑する現状を打破するきっかけとなったこと。

母親の反省点として気づいたことは、「理由も聞かずに一方的に叱る」「子どもの言葉を聞き流す」「いい加減な対応」など、母親自身の対応のつたなさや、今まで見過ごしていた子どもの気持ちや行為の意味を感じることができるようになった。つまり、母親の言葉での対応が子どもを傷つけたり、励ましになったりするので、母親の言葉の影響力の大きさ、言葉の大切さを痛感するようになったこと。

また、子どもとの会話を討論会で発表し、他の参加者に聞いてもらうことで、心が開放され重荷が一つ外

れたとの参加者の発言があった。

2. 母親の変化

母親は子どもとの会話を書き留めるだけでなく、討論会に参加して話し合うことによって、それぞれの母親の対応、対処方法にふれる。この他、③「子どもの心を閉ざす対応」のような事例を聞くと、自らの対応のつたなさも容認でき気持ちが楽になる。この間接的自己容認は、無理なく自らの意識改革を促し、子どもとの対応時の気持ちのゆとりとなり、子どもに対する態度や気持ちの変化となって現れる。

母親が冷静に子どもの気持ちに寄り添って話を聞くと、子どもの持つ有能さやその子なりの賢明さが見えてきて、子どもへのいとおしさが増してくる。子どもの言葉や行動にいらだつことの多かった母親の自覚の現れ、いわゆる変化である。

結論と考察

母親が子どもとの会話を書き留め、それを持ち寄って討論会で話し合う。この連動行為が母親を以下のような意識改革へと導く。

①子どもを認め、受け止める。

子どもは母親に認められて、自己信頼感を育む。

②子どもとの距離を調節。

言葉の記録行為や討論は日常の生活の場から一步外に外れて子どもとのかかわりを客観的にみるので、親子間の距離を調節する役目を果たすことにもなる。

③母親は自分の言動に対する子どもの反応から自身自身の拙さに気づき反省している。

④母親の言葉に関する感性が育まれ、子どもの言動の奥に潜む子ども自身の思いに寄り添うことが可能となる。

⑤子どもへの否定的な言動が減り、子どもが母親に心を開くようになり、子どもとの会話の頻度が増す。

⑥子どもを見つめて得た体験を子育ての中で再度役立てている。このフィードバックできることこそが母親同士が話し合うことの効果であり、母親の育児力の成長の源である。

子どもの言葉の記録行為と討論会に①～⑥のような意義が認められ、母親の育児力向上へと導いていく手段となることが結論づけられた。

活動の輪が少しずつ広がってきているが、まだまだ、言葉に対する意識が低い母親は多い。その母親達にどのように伝えるかが、先回と同様、課題である。